

授業科目名 <英訳>	中国古代史の資料に触れる An Introduction to Historical Materials in Ancient China			担当者所属 職名・氏名	人文科学研究所 助教 土口 史記				
群	拡大群	系列	人社系	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	ゼミナル
開講年度・ 開講期	2015・前期	受講定員	6人	配当学年	1回生		対象学生	全学向	
曜時限	月5	教室	人文科学研究所附属東アジア人 文情報学研究センター 中会議室 (北部構内)			使用言語	日本語		
キーワード	中国史 / 古代史 / 東洋史 / 歴史学								

[授業の概要・目的]

我々は普段どのようにして「歴史」に触れているだろうか。高校の世界史科目にしる一般向け概説書にしる、日常的に触れるものに限定してみると、そこに見られる「歴史」とは研究者が一次史料を読解した編集した結果として提示されたものがほとんどである。魚の切り身しかみたことのない子どもは、切り身が海中を泳いでいるものと想像してしまうという。歴史と史料の関係も同じく、編集加工を経たいわば調理済みの歴史から、生のままの史料の姿を想像することは難しい。

しかし、史料のないところに歴史研究はありえない。お客様として調理済みの歴史だけを賞味するのではなく、料理人と同じ側に立って生の史料の姿に触れてみる、すると、調理の仕方はただ一つではないということ、しかし既成のバイアスから逃れるのは口で言う程に簡単ではないということがいささかなりとも感じ取れるであろう。

以上のような主旨のもと、本授業では中国古代史研究の現状とその背景となっている史料状況について講じ、また受講生自身が選んだ任意の史料を読解する。

史料の読解という歴史研究において最も基礎的な作業を受講生自らがおこなうことによって、その手法や必要なツールについて把握し、さらには我々が一般に触れている歴史解釈・歴史観・歴史理論などが一次史料の集積と加工の結果にほかならないということを実感してもらうこと、それが本講義の目的である。

[到達目標]

漢文史料読解のために必要な辞書、事典その他参考書類の使用方法を把握できるようにする。さらにこの初歩的な技術を前提として発表と議論を繰り返すことによって、歴史に対する理解は史料に対する理解から出発する他ないという基本的にして重要な事実を実感を伴って理解することを目標とする。

[履修制限の方法]

受講定員を超える受講申込があった場合は無作為に抽選を行います。

[授業計画と内容]

1～4週目：オリエンテーション

中国古代史の現状と史料の概況について紹介する。実際の史料を数点とりあげ、教員が読解する。読解にあたり、語義や出典をどのように調べるのか、参考書や図書館をいかに利用するのかについても簡単に解説する。

5～13週目：発表と議論

受講生には各自の興味関心に基づいて中国史上の史料を選択し、予習のうえでその読解を発表する。これに対して教員が補充・解説を加え、他の受講生に対しても意見を求める。各自最低1回の発表を担当することを求める（分担回数は受講生の人数に応じて確定する）。

中国古代史の資料に触れる(2)

【履修要件】

特になし

【成績評価の方法・観点及び達成度】

平常点、及び担当した発表の内容により評価する。

【教科書】

使用しない

【参考書等】

(参考書)
授業中に紹介する

【授業外学習(予習・復習)等】

毎回の講義は受講生の発表に基づいて進めるため、予習として課題史料をあらかじめ自分で読解して見る必要がある。そのための具体的な方法については第4週目までの講義で説明するが、漢文史料の読解の場合、普段は何気なく用いている漢字の意味を一字一句詳細に調べる態度が必要であることをまずは念頭において予習に臨んでもらいたい。

【その他(オフィスアワー等)】

歴史研究の実態に興味のある受講生を対象とするが、単純に中国古代史への関心がありさえすれば構わない。史料を読むためには漢文や現代中国語の知識がいずれ不可欠となるが、本ゼミではその履修歴を問わない。ただし、発表のためには図書館等を利用した予習が必須であり、歴史研究者が普段おこなうのと同種の作業を自分自身で体験することが本授業の重点であるということに留意されたい。